

「平和への思い」

八幡中学校 二年 あかし 明石 みれい 美鈴

平和学習で原爆ドームについて調べたことがあります。そこで、原爆を落とされる前のドームの姿と、落とされた後の姿を目にしました。窓が割れ、壁が崩れ、ドーム部分が骨だけになった姿、これが一瞬でおこった出来事なのかと思うと、その悲惨さは一目瞭然でした。7万人がなくなり、広島市の人口の約四割、五人に二人が亡くなったと知りました。昨日まで仲良くしていた友達が、いなくなっていた可能性だってあります。そんな理解不能な出来事が、この世界で起こっていたこと、そしてみんなが、そんな世界を生きていたことに驚きを隠せませんでした。

実は私は、こういった広島の話、ひいばあちゃんから直接聞いたことがあります。ひいばあちゃんは岡山の人で、当時の広島ともかかわりが深かったのです。原爆が落ちた時も、きのこ雲が見えたそうです。飛行機は頭上を飛んで行ったことを覚えているとっていました。いつ敵兵が来るかわからない、自分たちのところにもいつ原爆がおとされるかわからない、「死」が常に身近にあった状況で過ごしていたといいます。私は、それを聞いて驚き、自分たちの時代に戦争がないことに心から安堵しました。そして、そのような世界で生き抜いてきた人たちは、すごいと思いました。

戦争の悲惨さは、実際に経験した人から聞くと、身に染みて感じるものだと思います。しかし、戦後八〇年がたち、戦争体験をした人たちは、少なくなっています。直接、聞くことができなくても、伝え続けていかなければ戦争の怖さを私たちは知ることができないでしょう。戦争の悲惨さや恐怖を知ることが新たな戦争を生み出さないことだと思います。80年前の人々の恐怖や苦勞を知ると、それを耐え抜いてきたことに尊敬の念を抱きます。そして、その後ずっと、平和を守ってくれて今の私たちのくらしを作ってくれたことに、感謝しないといけないと思いました。私たちは、「平和」が「ふつう」だと感じています。でもこの「ふつう」はたくさんの悲しみや苦しみの上にあることを忘れてはいけないと思いました。

そして、私たちも、これからもずっと「平和」が「ふつう」だといえる世界を作っていきたいです。私にはなにができるか、どう過せばいいのか考えながら、これからも過ごしたいです。

## 令和7年度「平和への誓い」

### 「平和について考えたこと」

八幡中学校 二年 井澤 結珠音 いざわ ゆずね

「平和」について、何を知っていますか？戦争について、何を知っていますか？…  
みなさんならこの質問に、どう答えますか？

私には90才を超えるおじいちゃんがあります。おじいちゃんには、戦争に行った経験があるそうです。おじいちゃんは小さいころから私に色々と教えてくれて、今もとても元気で頼りになります。でも、わたしはおじいちゃんから、戦争の話聞いたことはありません。お母さんから、あまり聞かないようにと言われていました。おじいちゃんは、当時の戦争のことを話すのは、怖くていやだといいます。戦後八〇年たった今でも、おじいちゃんは、戦争のことを話したがりません。小さいころから、「そういうものなんだ。」と漠然と私は思っていました。

先日、私の好きな芸能人がNHKの「ぼくたちは戦争を知らない」という番組に出ているため、私はたまたまこの番組を見ることになりました。そこで印象的だったのは、沖縄戦で生き残った方のお話でした。「兵隊がやってきて、お母さんは目の前で撃たれてなくなった。お母さんが自分に覆いかぶさっていたため、自分は助かったけれど、自分のせいでお母さんは死んだ。ずっとそのことを抱えて生きている。」という話でした。自分を責めて生きているひとがいることを知りました。この作文を書くときに、「おじいちゃんも、もしかしたら近いことがあるのかな。」そんな考えが私の頭の中に浮かびました。

私たちは、戦争の事を知らないし、もっと知るべきだと思います。しかし、いざ戦争を体験した方を目の前にすると、なにを聞けばいいかわかりません。これは、とても難しい問題だとも感じます。私は家族であるおじいちゃんに、嫌な思い出を思い出させたくない、とも思います。八〇年間も話したくない思い出に触れて、おじいちゃんを悲しませたくないのです。

でも、考えてみると、こうして戦争にかかわった方に、思いを寄せることが大切なのかな、とも思えます。戦争に行きたいわけではないのに、徴兵されたら万歳をしなければいけなかった当時の若者たち、その家族、生き残って帰ってきた後も続く苦しみ、失われた多くの命。想像するだけで、つらくてたまりません。当事者だったら、耐えきれません。戦争を経験した方々は、そんな思いの中を生きてきたんだと思います。誰もいい思いをしない、すべての人が悲しい思いをする戦争は、もう二度と起こしてはならないものです。私たち若い世代が、戦争の記憶にふたせず、向き合い、思いを馳せるということが「平和」を守ることだということを忘れず、これからも過ごしていきます。